４．管内採卵鶏農家における鶏痘の発生

和歌山県紀北家畜保健衛生所
○片山晃志、藤原美華、小松広幸

平成２８年５月、ひな壇２段の開放鶏舎で採卵鶏２，５００羽を飼養する農場から２７ヶ月齢の１鶏群で死亡羽数増加の連絡が入り、立入検査を実施した。簡易検査で鳥インフルエンザは否定されたが、死亡鶏・生鶏ともに頭部から頸部にかけ痂皮を呈するものが多数羽確認されたほか、重度のワクモの寄生が認められたため、生鶏３羽で病性鑑定を実施した。解剖前の検査で３羽すべてにおいて重度の貧血と削痩、顔面から頸部にかけて痂皮の形成および肉冠・肉垂に発痘が認められた。解剖所見では卵墜と卵巣静止が観察されたほか、胃腸内容物が乏しい状態であったことが判明し、持続的な飼料摂取量の低下が起きていたと推察された。病理組織学的検査では発痘部の皮膚から棘細胞の風船様変性、有棘層の肥厚、ならびに腫大した棘細胞に細胞質内封入体（ボリンゲル小体）が認められた。これらの所見より本病を皮膚型の鶏痘と診断した。通常、皮膚型の鶏痘のみで死亡羽数が増加することはまれであるが、粘膜型の場合に他の呼吸器病と混合感染することで死亡率が高まることがある。しかし、本事例では呼吸器病の症状は見られず、皮膚型の鶏痘とワクモの重度寄生の結果、重度の貧血と一般状態の悪化から飼料摂取量が低下し、死亡羽数が増加したものと考えられた。